

平成 2 3 年 1 0 月 1 1 日
茨城県立土浦第一高等学校
進修同窓会旧本館活用委員会

←
富山県立南砺福野高等学校旧本館
(国指定重要文化財) 視察団一行

同窓生の「心のふるさと」であり、先人の志が詰まった本校旧本館は、築後 100 年を越えている。この国重文をいかに保存活用していくのかは、私たちに突きつけられた大きな課題である。今夏訪れた富山県の南砺福野高校では、国重文の建物はすでに解体修理を済ませ、その維持活用は、同窓会も加わり図られていた。そこで私たちも、旧本館を未来永劫に引き継いでいかねばならない、との決意を一層強くした。この決意を熱気の渦とし、共感の輪を広めたい。



富山県立南砺福野高校を訪問

この夏の 8 月 1 日、私たちは富山県立南砺福野高等学校（旧富山県立農学校）を訪問した。同校には、平成 9 年に国より重要文化財の指定を受けた旧農学校本館があり、その校舎は、すでに平成 17 年に解体修理を完了させ、保存活用に関する活動も精力的に展開されているというのだ。今回は、本校の旧本館と同じように、明治期を代表する国重文の学校建築について、その維持利用の実情を視察し、本校における管理運営に資する調査研究を推進する、との目的で実施された。

ご参加を賜ったのは、経歴、年齢や職業を異にするものの、本校あるいは旧本館に、並々ならぬ熱き心を寄せる関係者 19 名。何とか都合をつけられ、経済的・時間的な自己犠牲を顧みず、万難を排し駆けつけて来られた気高い志が一人一人に匂い立つ。中には、周りから厳しい視線が注がれたり、来浦するのに車で 3 時間余を要したりする「試練」をも泰然として超克し、強い使命感をもって一行に加われた同窓生もおられた。もちろん初めてお目にかかる方々も多く、向かう車中では、資料に綴じられた名簿に基づき、それぞれを紹介するシーンが設けられた。

砺波平野の散村に屹立する学校

同校が建つ福野は、砺波平野の真っ直中に位置し、今でも典型的な散村の形を残す米作農業地帯である。渺々たる田園風景を目の当たりにすると、「農学校」の創設に、大きな期待をこめた先哲の沸き立つ心意気が、そよぐ風の音となって伝わってきそよな感じさせしめてしまう。

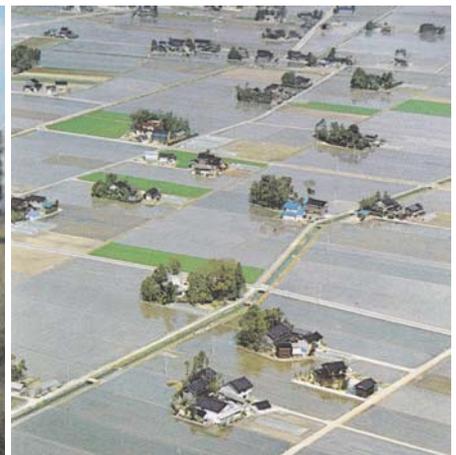
ここで、この地域の社会環境の特色をなす「散村」について付言しておきたい。

それは、集落の平面形態の一つで、広大な耕地の中に家屋（孤立荘宅ともいう）が一戸ずつ分散している村落をいい、砺波平野では「散居村」とも呼んでいるものだ。集落の発生が新しく、協同防衛・共同水汲み場などの必要がない場合や新大陸の大規模機械化経営を行う農業地帯などによく見られる。わが国では、富山県の砺波平野・黒部川扇状地、香川県の讃岐平野、静岡県の大井川・天竜川などの扇状地や、人口密度の低い北海道の開拓村などで多く認められている。

散村の典型が、ここ庄川扇状地（砺波平野）で、ここではフェーン現象によって火災が発生しやすく、類焼防止の目的で散村形態が発達したといわれている。220 km²に 7000 戸程度が散らばっている景観は、16 世紀末から 17 世紀にかけて成立したと考えられる。また庄川はしばしば氾濫したため、この地域に住みついた人々は、平野の中でも若干周囲より高い地点に居を構え、治水対策に苦心惨憺しつつ周囲を水田として開発してきた。このような住居と水田の配置は、農民にとってはきわめて効率的で便利であった。そのため、前田氏の支配下にあった時代でも、農民たちは引地・替田を行って自宅周辺に耕作地を集めた。ただ、家屋が個々に孤立し集落を形成していないがゆえに、冬には厳しい風雪に直接さらされることになる。これに対処する生活の知恵として、家屋の周囲にカイニョ・カイニユと呼ばれる屋敷林が設けられているのだ。

世界的には、イギリスの大半、フランス西部からライン川下流域、エジプト、

中国東北区の北部など民族・地域に関わりなく認められているものである。



空から望む砺波平野の散村



カイニョに囲まれた散村の家々

福野 IC を降りると、バスは、50 m くらい離れて建つ農家が、それぞれの周囲に広がる美田を今もなお守り続ける。「散村」の中を走り抜けていく。すると、遠目にも「明治期の建築」とわかる学舎が徐々に大きくなってきた。正門玄関に到着すると、学校・同窓会の皆様がそろって出迎えてくださり、さっそく国重文建物の一室に通された。そして、学校の歴史や文化財の保存活用等について、懇切丁寧なご説明を頂戴したのだった。

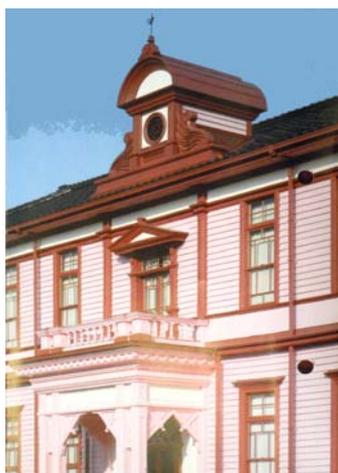
学校の設立と校舎（国重文）建設

最初に、文化財校舎を映像で紹介するDVDと、用意していただいた資料をもとに、概説を一通りうかがうことができた。その後、国重文の学校施設の巡覧・視察に移ったが、そこでも、種々雑多な多くの質問に誠実にお答えしていただけたのは、本当にありがたい限りであった。そもそも富山県立農学校は、明治34年、それまでの富山県簡易農学校（明治27年創立）を改称し設立された。簡易農学校は、砺波郡の素封家島家に、天保9年に生を受けた巖氏の高潔なる献身的活動により発足したものであった。氏は「砺波地方の産業育成のためには人材を養成する農学校の設立が緊要だ」と訴え続け、早くから県当局や地元有力者に熱心に働きかけていた。しかし、志半ばで病魔に冒され、明治12年、42歳の若さで亡くなった。だが、農学校の建設と、その資金援助として資産の大部分を遺贈する旨の遺言状を書きためたため、氏の遺志は地元有志に受け継がれ、15年後に「簡易農学校」の創設として結実された。

ただ、創設はされても、廃校となっていた小学校を利用するなどして、本格的な校舎は存在しなかった。こうした状況は、簡易農学校から県立農学校へと移り変わっても同じであった。そしてようやく明治36年に、和洋折衷木造2階建ての本館と、左右両翼に平屋建ての教室棟からなる新校舎が竣工し、島巖氏の念願は名実ともに達成されることになった。



2階屋根中央のゲートル



国重文「校舎」の正面中央

17〜19世紀のアメリカ大陸で住宅建築として発展したコロニアル様式。細い板を段が付くように重ねた下見板張り、ペンキ塗り、上げ下げ窓の西洋建築のデザインを基本としている。外観的には、正面中央の玄関ポーチ部分が建物から突出し、その上にのるのが、ギリシア風飾り窓を背後にもつバルコニー。さらに2階屋根中央の半円屋根飾り（ゲートル）が建物全体に荘厳な趣を醸しだし、思わず目を奪われる。これは、バロックに社寺建築の細部が入り交じった、南蛮風とも言える幻想的な和洋折衷のしつらいなのだ。また1階玄関の開き扉の意匠と、その上部にある半円形の欄間も見応えがある。正面中央に装飾がまとめられているのは本校と同じで、当時の日本における洋風建築の特徴がうかがい知れよう。



学校の歴史資料が並んだ展示室

学校と地域の連携による永久保存

保存修理の概略をたどると、大正2年に、外壁が淡い緑色から、現在の桜色に塗り替えられた（本校は創建時より華麗な桜色）。昭和41年に校舎が全面改築されるにあたり、農学校本館は、永久保存のため、昭和43年に敷地内の現在地に移築され、改修工事も行われた。その際に、創立の功労者である「島巖」の名と、その浄財で設立されたことを後世にまで伝えるため、当時の吉田実富山県知事によって「巖浄閣」と命名されたのであった。平成9年には、国の重要文化財に指定された。そして、平成14年からは明治期の姿に復元する修復工事が始まり、「正門」の復元とともに平成17年に終了した。

その間、巖浄閣は「島巖」や「学校の歴史」に関する資料の展示室、あるいは生徒の芸術作品展覧会場として利用されてきた。現在では「県立美術館移動美術展」「特別企画展」「コンサート会場」など、文化活動の拠点として、外部に向けても多様に活用されている。管理運営面では同窓会も加わった委員会が推進役を担い、保存維持面では、行政当局が強い関心を寄せ、機敏に対応していると伺う。

損傷が広がる本校旧本館の今後は

「モノにココロあり。先人のご苦労に対する感謝の念を持つ気構えがなくして、文化財を語るなかれ」と、建築文化史家一色史彦氏（高11卒）は以前に話された。今回の「巖浄閣」では、先覚者への感謝の念が、その「名」の中に直接的表現で込められているのに接し、一色先生の言葉が頭の隅をよぎっていった。また、先人の遺産たる文化財の保護・保存・維持が豊しく叫ばれ出して久しいが、現実の場では「守っていいこう」との気概と情熱にあふれた人々の必死の叫びと行動によって、それがこなされてきた経緯も把握できた。もし「守ろう」とする大きなうねりが起きなければ、文化的価値がどんなに高いにせよ、建造物は所詮消滅する運命にあるのかもしれない。そうした意味で、今回の視察は実に有意義であった。

それにしても、「教育の充実にこそ、日本の将来を築く基礎づくり」という先哲の志が凝縮され、私たちにとっては「宝物」と言える本校旧本館。竣工して107年を経て、損傷拡大を懸念する声は次第に高まってきている。先の大震災による壁の剥落やひび割れは、至る箇所で見られる。過日も、玄関の柱が台座よりずれてしまったため、文化財専門家による修復工事がなされた。その折にも、単なる「ずれ」とどまらず、長年の風雪による柱の中心部（芯柱）の腐食は甚だしい、との指摘を受けた。所轄官庁である国・県は、調査には足を運んでいただいたが、本格的補修については、今も口を濁すばかりだと聞く。今や「待ったなし」だと心得る者には、もどかしさだけが漂ってくる…。